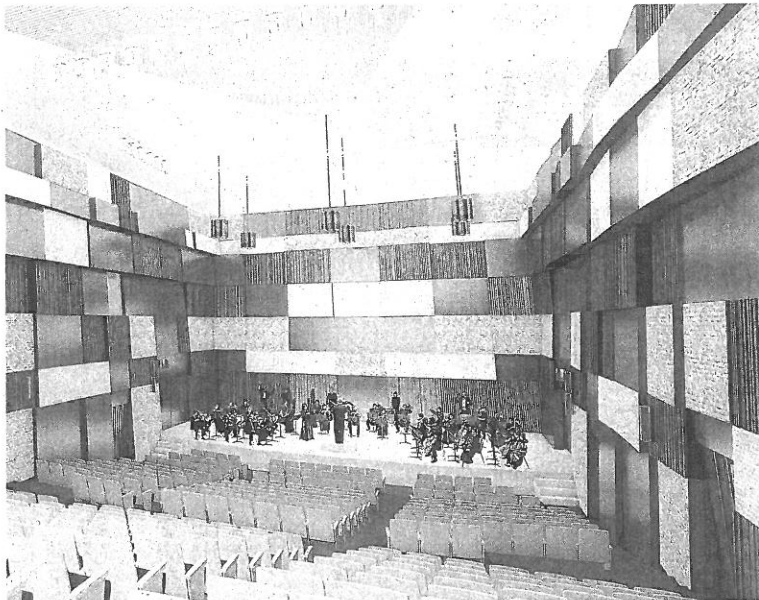


大谷石 音大ホールに活用

音響効果に優れた素材



コンサートホールの完成予想CG。大谷石などを使用し、最新の音響設計に基づいているという(武蔵野音大提供)

加工しやすく、独特な風合い

宇都宮市特産の大谷石が、武蔵野音大(東京都)が建設しているコンサートホールの内装に使われることが決まった。軟らかいことから音響のための凹凸をつけやすく、音楽ホールの雰囲気合い落ち着いた風合いが決め手となったもので、新たな大谷石の活用法として注目を集めそうだ。

学生が発表演奏会などで使うため、同大の江古田キャンパス(東京都)に新設するコンサートホールは約420人を収容できる。大谷石は、壁面約900平方メートルのうち、客席の両側や舞台正面の約175平方メートルに約6・3メートルが使われる計画だ。様々な楽器の音色に最適な響きとなるよう、大谷石やタイル、ガラスなど様々な材料の組み合わせと配置を繰り返し試行したという。

同大の福井直昭副学長は「軟らかいため加工しやすく、独特な風合いがあるためデザイン性にも富んでいる」と採用した理由を話す。

音響の設計は、クラシック音楽の殿堂といわれるサントリーホール(東京都)やCDの録音に定評のある那須野が原ハーモニーホール(大田原市)を手がけてきた永田音響設計(東京都)

が担当する。コンサートホールは木が使われることが多く、大谷石は珍しいというが「音を拡散させるための凹凸をつけやすく、様々な楽器の音域に対応することが可能。音響効果には好ましい素材」と太鼓判を押している。

同大は1929年に創立。49年に日本初の音楽専門大学として認可され、数々の音楽家を輩出してきた名門。2019年の創立90周年に向けて、入間キャンパス(埼玉県)を17年度に江古田に統合するため、校舎の建て替えやホールの新設などのプロジェクトを進めている。